

本日代現
集全學文

23

川上岩

川司野

末小泡

明劍鳴

集集集



小 上 岩

川 司 野

未 小 泡

明 劍 鳴

集 集 集

改
造
社
版

杉浦非水装幀

昭和五年四月十日印刷
昭和五年四月十三日發行

現代日本文學全集 第二十三篇

著
作
者

小上岩

川司野

未小泡

明劍鳴

發行者

山

本

美

東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者

杉

四

愛

11

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四番地

改

造

社

電話 芝 (43)

 八
 四
 〇
 四
 番番番番番

「泡鳴・小劍・未明集」目次

岩野泡鳴集

卷頭寫眞(照影・筆蹟)

序 四

耽 溺 五

ぼ ん ち 四七

人 か 熊 か 六

毒 藥 女 八三

征 服 被 征 服 一四六

(附) わがゆらぎ(六五) 眞赤な太陽(八二) プシの花(一四七)

中禪寺にて(一〇五)

年 譜 二〇六

上司小劍集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟) 二一〇

鱧 の 皮 二一一

妾 の 垣 二一二

天 満 宮 二二三

父 の 婚 禮 二六二

東 光 院 二七四

生存を拒絶する人 二八八

石川五右衛門の生立 三三〇

死 刑 三三四

女 帝 の 惱 み 三五四

空 想 の 花 三六六

新しき世界へ 三七七

分 業 の 村 三八六

高さを競ふ……………三九五

(附) コスモス(三三) 梅の花、櫻と梅と(三六) 品性庵人
格居士(七三) 龍土の穴(六七) 鐵の門(六五) 白い蚊帳
(三八七) 雲の色(三四四) 遊び(四二二) 小ひさな藝術家(四〇〇)

年譜……………四〇三

小川未明集

巻頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………四〇六

烏 金……………四〇七

雪 來る 前……………四一三

越 後 の 冬……………四一七

薔 薇 と 巫 女……………四二三

物 言 は ぬ 顔……………四二九

紫 の ダリ ヤ……………四五四

少 年 の 死……………四八〇

魯 鈍 な 猫……………四八五

河の上の太陽……………五二六

う ば 車……………五四六

空 中 の 藝 當……………五五六

火 を 點 ず……………五六七

謠をつかなかつたら……………五七一

靴 屋 の 主 人……………五七六

死 者 の 満 足……………五八四

青 空 に 描 く……………五九一

山の上の木と雲の話……………六〇〇

河 水 の 話……………六二二

(附) 平野に題す(四三三) 同(四四六) 同(四四三) 同四

(四三八) 一月八日(四五三) 田舎の秋、高山の秋(四七九)

同(四八四) 少年の見る人生如何(五三五) 同(五四五) 同三

(五五五) 斷詩、北と南に憧れる心(五六六) 單調の與ふる魔

力(五七〇) 友達に、彼等(五九〇) 無題(六〇四) 刹那に起り

年譜……………六〇五

岩野泡鳴集

序

泡鳴氏の人及び藝術

岩野泡鳴氏は明治大正の我が文壇に於て、巨大なる足跡を遺した文學者の一人である。作家としては其の作品の量に於ても質に於ても、恐らく第一位を占むべき、決して第二位に落すべからざる人であらう。

泡鳴氏は尤も多くの小説に力を注いだし、作品の量も非常に多い。従つて藝術家として人としての泡鳴氏を知るには、何と言つても其の小説を讀むのが便利であらうが、しかも歐洲近代の藝術論を、夙くから手に入れて、我が文壇に紹介したことも亦忘るべからざる業績の一つである。アーサー・シモンズの『表象派の文學運動』などは、當時に於ては藝術論の尖端を行つたもので、今も尙その恩恵を蒙つてゐるものが頗る多いであらう。

素と泡鳴氏は詩人で、野口氏や蒲原氏と共に、當時の詩壇に於ける一方の驍將であることは、私が茲に贅するまでもない。私は詩の批評は出来ないから、單に氏の小説だけについて推察の勞を執りたいと思ふが、氏の劇作と共に、その

詩も亦印象派或は象徵主義の藝術で、奔放熱烈な、氏の利那主義的な情感を表現するに於て、他の追隨を許さざる、氏特得の自由大膽な作風を發揮したものと云つて可いであらう。鑿造の素材な、どつしりした彫刻でも見るやうなのが、恐らく氏の藝術の手法で、氏の思想感情を盛るには、それが最も適當なものであつたのは言ふまでもない。氏の藝術論に於ける確乎たる主張は、氏自身の學問と體驗から生れ出たもので、その主張を行ふに當つては、直情徑行一步も譲らないところがあつた。さうした態度は氏の場合には多少損であつたかも知れないが、その自信の強いことと闘志の熾んなことは、亦氏の大きな高さを成してゐるものであらう。

『耽溺』といふ氏の最初の小説は、私が當時最も感服したものの一つだが、表現法に氏特得の生彩があつた。それに續いた『斷橋』から晩年の『お清の失敗』に至るまで、作品の数は非常に多い。どれを讀んでも氏の生命が吹きこまれてゐる。作品によつては頗るヒウモアの要素に富んだものもあるし、社會的な傾向を帯びたものには、諷刺的な要素を多分にもつたものも鮮くはない。利那主義の捧持者であつた氏は、戀

愛事件に於て、屢々世間を驚かしたが、政治的社會的な歴史上の出来事についても、氏特有の批評的態度でアイロニカルに書いたものが、可なり有つたやうに思ふ。氏はさう云ふ客觀的な事件を取扱ふのに、頗るビビッドな表現法をもつてゐた。これは氏に藝術家としての優れた敏感性があつたからで、氏の感覺の熔爐へ入ると、何ものも泡鳴式な生彩を帯んで來たものである。

氏は正しく國家主義者であつた。日本人主義であつた。氏は人一倍獨創を尙んだ。そして亦或る程度まで獨創家であつた。氏の藝術はもつと高く買はれても可いものだらうと思ふ。多分さう云ふ時期も來るだらうと思ふが、繪具が少し生だと思ふやうな點では、多少割引をされてゐるのかも知れない。しかし繪具の生なところに氏の利那主義を行つた印象派風の藝術の生命があるので、いつの場合でも氏の繪具には想像以上の細密な感覺が生きてゐる。泡鳴氏のやうなのが、矢張り眞實の藝術家ではないだらうか。

昭和五年三月

徳田 秋聲

耽

溺

僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろいろ取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出来ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになつた。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人かかへてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、随分さう／＼しかつた。然し僕は三味線の浮々した音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入つた。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかになかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが繁り立つて、僕の二階の家の根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもろさうな物だが、之を見てゐると、何となくしみりと、氣持のいい物だから、僕は芭蕉葉

や青桐の葉と同様に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐそばに見える。

それに、その葉かげから、隣りの料理屋の綺麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、飄々なりの池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んであるのやら、例の箱庭式はこせつて厭な物だが、掃除のよく行き届いてゐたのは、これも氣持のいい事の一つだ。その庭の片端の僕の方に寄つてゐるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸——それも僕の座敷から見える——は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に子供が二人、それに主人の姉と藝者が加はつてゐた。主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の姉——名はお貞——と云ふのが、昔からのえら物で、その女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出る

と、井筒屋の女將お貞婆さんと云へば、なかなか幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の悪い心に落ちないことがあると、意張りがたがるお客が家の者にがなりつく様な權幕であつた。

お君といふその姉、乃ち、そのの娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で、——客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、——とんなな兩親のしてゐることがもどかしくて、もどかしくてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐つて、目を離さず、その長い頤で兩親を使ひまはしてゐる。前年など、かかへられてゐた藝者が、この娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがある間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいい料理店ではなかつた。

僕が英語が出来るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその子供に英語を教へてくれると頼んで來た。それも眞面目な依頼ではなく、時々西洋人が來て、應對に困ることがあるので、『おあがんなさい』とか『何を出しませう』とか、『お酒をお飲みですか、ビールをお

「飲みですか」とか、『藝者を呼びませうか』とか、『大府上機嫌です、ね』とか、『またいらつしやい』とか、さういふことを専門に教へてくれると云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事にあひまに教へてやるのも面白と思つて、會話の目録を作らして、そのうちを少しづつと二人がほかで習つて来るナショナル讀本の二とを讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちゃんとは毎日午後時間を定めて習ひに來た。正ちゃんは十二歳で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちゃんは、學校のないので、午前十一時頃にやつて來た。僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いい加減に教へてすましてしまふと、

『うちの藝者も先生に教へていただきたいと云ひます』と云ひ出した。

『面倒くさいから、厭だよ』と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさうとしてゐたのだ。正ちゃんは無邪氣なもので、

『どうせ習つても、馬鹿だから、分るもんか?』

『なぜ?』

『こないだも大ざらひがあつて、義太夫を語つ

たら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ——あ、あれがうちの藝者です、寝坊の親玉。』

と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寝巻姿が、楊枝を銜へて、井戸端からこちらを見て笑つてゐる。

『正ちゃん、いい物をあげようか?』

『ああ』と立ちあがつて、兩手を出した。

『はふるよ』と、しなやかにだが、勢ひよくからだを曲るかと思ふと、黒い物が飛んで來て、正ちゃんの手をはづれて、僕の肩に當つた。

『おほ、ほ、ほ! 御免下さい』と、向うは笑ひくづれたが、直ぐ白いつばを吐いて、顔を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。

『これはわたしのだ。さつき井戸端へ水を飲み

に行つた時、落したんだらう。』

『あの狐に取られんで、まア、よかつた。』

『可哀さうに、そんなことを云つて——何といふ名か、ね?』

『吉彌と云ひます。』

『歸つたら、禮を云つてお呉れ』と、僕は僕の讀みかけてゐるメレジコウスキの小説を開いた。

正ちゃんは、裏から來たので、裏から歸つて行つたが、それと一緒に何か話をしながら、家に這入つて行く吉彌の素顔を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黒いので、僕はいや氣がした。

二

僕はその夕がた、あたまた勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、角の立たない様にわざと裏から行つた。

『あら、先生!』と、第一にお貞婆さんが見つけて、立つて來た。『こんなむさ苦しいところからお出でんでも——』

『なアに、僕は遠慮がないから——』

『まア、お這入りなさつて下さい。』

『失敬します』と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裡のそばへ坐つた。

主人は尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同様の風をして、廣い臺どころで働いてゐた。僕の坐つたうしろの方に、廣い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。墨一枚ほどに切れてゐる細長い圍爐裡には、この暑いのに、燃木が四五本もくべてあつて、天井から雁木で釣るした

鐵瓶がぐら／＼煮え立つてゐた。

『どうも、毎度、子供がお世話になつて』と、爐を隔てて僕と相對したお貞婆さんが改まつて挨拶をした。

『どうせ、丁寧に教へてあげる暇はないのだから、お禮を云はれるまでのことはないのです。』
『この暑いのに、よう精が出ます、な、朝から晩まで勉強をなさつて!』

『さうやつてゐなければ喰へないんですから。』
『御常談を——それでも、先生は外の人と違つて、遊びながらお仕事が出来るので結構で御座ります。』

『貧乏ひまなしの譬へになりませう。』

『どう致しまして、先生——おい、お君、先生にお茶をあげないか?』

そのうち、正ちゃんがどこからか歸つて来て、僕のそばへ坐つて、今聴いて来た世間のうはき話を出す。お君さんは茶を出して来る。お貞が二人の子供を實子の様に可愛がり、また自慢するのが近處の人々から嫌はれる一原因だと聴いてゐたから、僕はそのつもりであしらつてゐた。

『どうも馬鹿な子供で困ります』と言ふのを、
『なアに、ふたりとも利口なちだから、おぼ

えがよくツて末頼母しい』と、僕は讀めてやつた。

『おツ母さん、實は氣が鬱して來たんで、一杯飲ましてもらひたいんです、どツかい座敷を一つ開けてもらひませうかと』

『それは有難う御座ります』とお貞はお君に日くばせしながら、
『風通しのええ二階の三番がよかる。あすこへ御案内おし。』

『なアに、どこでもいいですよ』と、僕は立つてお君さんについて行つた。煙草盆が來た、改めてお茶が出た。

『何をおあがりなさいます』とお君のおきまり文句らしいのを聴くと、僕が西洋人なら僕の教へた片言を試みるのだらうと思はれて、何だか厭な、小癪な娘だといふ考へが浮んだ。僕はいい加減に見つくるつて出す様に命じ、巻煙草をくはへて寝ころんだ。

先づ海苔が出て、お君が鳥渡酌をして立つた跡で、ちびり／＼飲んでゐると二三品は揃つて、そこへお貞が相手に出て來た。

『お獨りではお寂しかる、婆々アでもお相手致しませう。』

『結構です、まア一杯』と、僕は盃をさした。

婆さんはいろんな話をした。この家の二三年前までは繁盛したことや、近頃は一向客足が遠いことや、土地の人々の薄情なことや、世間で自家の缺點を指摘してゐるのは知らないで、勝手の良い泣き言ばかりが出た。やがてはしご段をあがつて、廊下に違つた足音がすると思ふと、吉彌が銚子を持つて來たのだ。けさ見た素都やなり振りととは違つて、尋常な藝者に出来あがつてゐる。

『けさほどは失禮致しました』と、しとやかながら冷かす様に手をついた。

『僕こそお禮を云ひに來たのかも知れませんが』
『かも知れませんが、お禮になりますまい!』

『いや、どうも——それでは、ありがたう御座ります』と、僕はわざとらしくあたまを下げた。

『まア、それで、あたゐる氣がするんだわ。』
吉彌はお貞を見て、勝利がほに扇子を使つた。

『全體、まア』と、はじめから怪妙な様子をしてゐたお貞が、『どうしたことよ、出し抜けになぞ見た様で?』

『なアに、おツ母さん、けさ、僕が落したがま口を拾つてもらつたんです』といふと、その跡は吉彌の笑ひ聲で説明された。

『それでは、いッそだまつてをれば儲かつたのに。』

『ほんとに、あたひ、さうしたらよかつた。』

『生憎銅貨が二三銭と來たら、如何に吉彌さんでも驚くだらう。』

『この子はなかく欲張りですよ。』

『あら、叔母さん、そんなことはないわ。』

『まあ、一つさしませう』と、僕は吉彌に猪口を渡して、『今お座敷は明いてゐるだらうか？』

『叔母さん、どう？』

『今のところでは、口がかかつてをらない。』

『ぢやア、僕がけさのお禮として玉をつけませう。』

『それは済みませんけれど』と云ひながら、婆さんが承知のしるしに僕の猪口に酒を酌いで、下りて行つた。

三

『お前の生れはどこ？』

『東京。』

『東京はどこ？』

『浅草。』

『浅草はどこ？』

『あなたはしつっこいのね、千束町よ。』

『あ、あの溝溜の様な池があるところだらう？』
『おあいにくさま、あんな池は近くにうまつてしまひましたよ。』

『ぢやア、うまつた跡にぐらつく安借家が出來た、その二軒目だらう？』

『しどいわ、あなたは』と、ぶつ眞似をして、『はい、これでもうちへ歸つたら、お嬢さんで通せますよ。』

『お嬢さん藝者萬歳』と、僕は猪口をあげる眞似をした。

三昧を弾かせると、べこん／＼とごまかし弾きをするばかり。面白くもないが、僕は酔つたまざれに歌ひもした。

『もう、よせ／＼』僕は三昧線を取りあげて、脇に投げやり、『おれが手のすちを見てやらう』と、右の手を出させたが、指が太く短くツて實に無恰好であつた。

『お前は全體いくつだ？』

『二十五。』

『うそだ、少くとも二十七だらう？』

『ぢやア、さうして置いて！』

『お父さんはあるの？』

『あります。』

『何をしてゐる？』

『下駄屋。』

『おッ母さんは？』

『藝者の桂庵。』

『兄さんは？』

『勸工場の店番。』

『姉さんは？』

『ないの。』

『妹は？』

『藝者を引かされる筈。』

『どこにつとめてゐるの？』

『大宮。』

『引かされてどうするの？』

『その人の奥さん。』

『なアに、妾だらう。』

『妾なんか、つまりませんわ。』

『ぢやア、おれの奥さんにしてやらうか？』と、からだを引ッ張ると、『はい、よろしく』と、笑ひながら寄つて來た。

四

翌朝、食事をすましてから、僕は机に向つてゆうべのことを考へた。吉彌が電燈の球に『やまと』のあき袋をかぶせ、はしご段の方に耳をそば立てた時の様子を見て、もうい奴、見ず轉

の骨頂だといふ厭氣がしたが、然し自分の自由になる物は、——犬猫を飼つてもさうだらうが——それが人間であれば、如何なお多福でも、一層可愛くなるのが人情だ。國府津にある間は可愛がつてやらう、東京につれて歸れば面白からうなどと、それからそれへ空想をめぐらしてゐた。

下座敷でなまめかしい聲がして、段々二階へあがつて來た。吉彌だ。書物を開かうとしたところだが、まんなら厭氣もしなかつた。

『田村先生、お早う。』

『お前かい?』

『來たら、いけないの?』びつたり、僕のそばにからだを押しつけて坐つた。それツきりで、目が物を云つてゐた。僕はその頸をいだいて口づけをしてやらうとしたら、わざとかほをそむけて、

『厭な人、ね。』

『厭なら來ないがいい、さ。』

『それでも、來たの——あたし、あなたの様な人が好きよ。商賣人?』

『ああ、商賣人。』

『どんな商賣。』

『本書き商賣。』

『そんな商賣がありますもんか!』

『まあ、ない、ね。』

『人を馬鹿にしてゐるの、ね』と、僕の肩をたたいた。

僕を商賣人と見たので、また厭氣がしたが、他日わが國を風靡する大文學者だなどと威ばつたところで、かの女の分らう筈もないから、茶化すつもりでわざと顔をしかめ、

『あ、いたた!』

『うそ、そんなことで痛いのですか!』と、ふき出した。卦算の龜の子をおもちやにしてゐた。

『全體どうしてお前はこんなところにぐづつてゐるんだ?』

『東京へ歸りたいの。』

『歸りたきやア早く歸つたらいいぢやアないか?』

『おツ母さんにさう云つてやつた、わ、迎へに來なきやア死んぢまふッて。』

『おそろしいコツた。然しそんなことで、びくつくおツ母さんぢやアあるまい。』

『おツ母さんはそりやア、可愛がるのよ。』

『獨りでうぬぼれてやアがる。誰がお前の様な者を可愛がるもんか? 一體お前は何が出来るのだ?』

の?』

『何でも出来る、わ。』

『第一、三味線は下手だし、歌もまづいし、ここから聴いてゐても、ただきやア、駭いてるばかりだ。』

『ほんとうは、三味線はきらひ、踊りが好きだったの。』

『ぢやア、踊つて見るがいい』とは云つたものの、ふと顔を見合はせたら、拘き附いてやりた様な氣がしたのを、しつツこいと思はせない爲め、まぎらしに仰向けに倒れ、兩手をうしろに組んだまま、その上にあたまとをのせ、吉彌が机の上でいたづらをしてゐる横顔を見ると、色は黒いが、鼻柱が高く、目も口も大きい。それに丈が高いので、役者にしたら、舞臺づらがよく利くだらうと思ひ附いた。鳥渡斷つて置くが、僕は或脚本——それによつて僕の進退を決する——を書く爲め、材料の整理をしに來てゐるので、少くとも女優の獨りぐらゐるは、之を演ずる段になれば必要だと思つてゐた時だ。

『お前が踊りを好きなら、役者になつたらどうだ?』

『あたし、賛成だ、わ。甲州にゐた時、朋輩と一緒に五郎、十郎をやつたの。』

『さぞこの尻が大きかつたらう、ね。』うしろからぶつと、

『よして頂戴よ、お茶を引く、わ』と、僕の手を拂つた。

『お前が役者になる氣なら、僕が十分周旋してやらア。』

『どこへ、本郷座？ 東京座？ 新富座？』

『どこでもいいや、ね、それは僕の胸にあるんだ。』

『あたゐ、役者になれば、妹もなりたがるにきまつてる。それに、あたゐの子。』

『え、お前の子供があるんか？』

『もとの旦那に出来た娘なの。』

『いくつ？』

『十二。』

『意氣地なしのお前が子までおツつけられたんだらう？』

『さうぢやアない、わ。青森の人で、手が切れてからも、一年に一度ぐらゐは出て来て、子供の食ひ扶持ぐらゐはよこす、わ。——それが面白い子よ。五つ六つの時から踊りが上手なんで、料理屋や待合から借りに来るの。「はい、今晚は「ッて、澄ましてお客さんの座敷へ這入つて来て、踊りがすむと、「姉さん、御祝儀は「ッて催促す

るの。小嬢な子よ。芝居は好きだから、あたゐよく仕込んでやる、わ。』

吉彌は直ぐ乗り氣になつて、いよくさうと定まれば、知り合ひの待合や藝者屋に披露して引き幕を贈つて貰はなければならぬとか、披露にまはる衣服はこれ／＼かかるとか、かの女も寝ころびながら、いろ／＼の註文をならべてゐたが、僕は、その時になれば、どうとも工面してやるがと返事をして、先づ二三日考へさせることにした。

五

それからといふもの、僕は毎晩の様に井筒屋へ飲みに行つた。吉彌の顔が見たいのと、例の決心を確めたのであつたが、當人の決心が先づ本統らしく見えると、直ぐまた僕はその親の意見を聴きにやらせた。親からは近々當地へ来るから、その時よく相談するといふ返事が來たと、吉彌が話した。僕一個では、また、或友人の劇場に關係があるのに手紙を出し、かう／＼いふ女があつてかう／＼だと、その缺點と長所とを誇張しないつもりで一考を求め、遊びがてら見に来てくれと云つて置いていたら、ついでがあつたからと云つて出て來てくれた。吉彌を

一夕友人に紹介したが、もう、その時は僕が深入りし過ぎてゐて、女優問題を相談するよりも、二人ののろけを見せた様に友人に見えたのだらう。僕よりもずっと年若い友人は、来る時にも『田村先生はゐますか』といふ様な調子でやつて來て、歸つた時にはその晩の勘定五圓なにがしを拂つてあつたので、氣の毒に思つて、僕は直ぐその宿を訪ふと、まだ歸らないと云ふことであつた。どこかでまた焼酎を飲んでゐるのだらうと思つたから、その翌朝を待つて再び訪問すると、もう出發してゐなかつた。僕は何か興ざめた氣がした。それから、「週間、二週間を経て、友人からは何の音沙汰もなかつた。然し、僕は、どんな難局に立つても、この女を女優に仕立てあげようといふ熱心が出てゐた。

六

僕は井筒屋の風呂を貰つてゐたが、雨が降つたり、餘り涼しくつたりする日は沸かないので、自然近處の銭湯に行くことになつた。吉彌も自分のうちのは立つても夕がたなどで、お座敷時刻の間に合はないと云つて、銭湯に行つてゐた。僕が行く頃には吉彌も來た、吉彌の来る頃には僕も行つた。別に申し合はせたわけでもなかつ

たが、時々向うから誘ふこともあつた。氣が附かずにゐたが、毎度風呂の中で出くはす男で、石鹼を女湯の方から貰つて使ふのがあつて、僕はいつも厭な、にやけた奴だと思つてゐた。それが一度向うから餘り女らしくもない手が出て、

『旦那、しゃぼん』といふ聲が聴えると、てつきり吉彌の聲であつた。男はいつも女湯の方によつて洗つてゐた。

このふたりは湯をあがつてからも、必らず立ち話だ。男は腰巻一つで、うちを使ひながら、湯の番人の坐つてゐる番臺のふちに片手をかけて女に向ふと、女はまた、どこで得たのか、白い寒冷紗の裏つき西洋寝巻をつけて、そのそばに立ちながら涼んでゐた。湯あがりの化粧をした顔には、ほんのりと赤みを帯びて、見ちがへるほど美しかった。

外にも藝者の消入りに來てゐるのは多いが、いつも目に立つのはこの女がこの男と相對してふざけたり、笑つたりしてゐたことである。はじめはこの男をひいきのお客位にしか僕は思つてゐなかつたが、石鹼事件を知つたので、これは僕の戀がたきだと思つた。否、戀べたきとして競争する必要もないが、吉彌が女優になつた

いなどは眞つかなうそだと合點した。急に胸がむか／＼として來ずにはゐられなかつた。その様子がかの女には見えたかも知れないが、僕は之を顔にも見せないつもりで、いそいで衣服をつけてそこを出た。しまつたと後悔したのは、出口の障子をつい烈しくしめたことだ。

けふは早く行つて、あの男またはその他の人と呼ばれないうちに、吉彌めをあげ、一つ精一杯なじつてやらうと決心して、井筒屋へ行つた。湯から歸つて直ぐのことであつた。

『叔母さん。』僕もこの家族の云ひならしに従つて、お貞婆アさんをさう呼ぶことにしたので――

『けふは今から吉彌さんと呼んで、十分飲みますぞ。』

『毎度御ひいきは有難う御座いますけれど、先生はさうお遊びなさつてもよろしう御座いますか?』

『なアに、かまひませんとも。』

『然し、まだ奥さんにはお目にかかりませんけれど、おうちでは獨りで御心配なさつてをられますよ。それがお可哀さうで。』

『かかアは何も知つてませんや。』

『いいえ、先生の様なお氣質では、つれ添ふ身

になつたら大抵想像が付きましますもの。』

『よしんば、知れたつてかまひません。』

『先生はそれでもよろしからうが、私どもがそばにゐて、奥さんにすみません。』

『心配にやア及びません、さ。』景氣よくは應對してゐたものの、考へて見ると、吉彌に熱くなつてゐるのを勘づいてゐるので、旦那があるからとても駄目だといふ心をほめめかすのではないかと取れないことではない。また、一方には、飲むばかりで借りが出来るのを、若し拂はれない様なことがあつてはと心配し出したのではないかと取れた。僕はわざと作り笑ひを以つて平氣をよそひ、お貞やお君さんや正ちゃんやと時間つぶしの話をした。吉彌がまだ湯から歸らないのをひそかに知つてゐたからだ。

『吉彌は風呂に行つてまだ歸りませんが――もう、歸りさうなものだに、なアと、お貞はお君に云つた。』

『もう、一時間半、二時間にもなる』と、正ちゃんの時計を見て口を出した。

『また、あの青木と蕎麥屋へ行つたのだらう。』お君が長い頸を動かした。蕎麥屋と聴けば、僕も吉彌に引ッ込まれたことがあつて、よく知つてゐるから、そこへ行つてゐる事情は十分察し

られるので、いいことを聴かしてくれたと思つた。然し、この利口ではあるが小癪な娘を、教へてやつてゐるが、僕は内心非常に嫌ひであつた。年にも似合はず、人の缺點を横からにらんでゐて、自分の氣に食はないことがあると、何も云はないで、親にでも強く當る。

『氣が強うて困ります』とは、その母が僕に曾て云つたことだ。まして雇ひ人などに對しては、最も皮肉な當り方をするので、吉彌はいつもこの娘を見るとぶり／＼してゐた。その不平を吉彌は度々僕に漏らすことがあつた。もつとも、お君さんをさういふ氣質に育てあげたのは、もとはと云へば、親達が悪いのらしい。世間の評判を聴くと、まだ肩あげも取れないうちに、箱根の或旅館の助平おやちから大金を取つて、水あげをさせたといふことだ。小癪な娘だけに段々癪けツ腹になつて來るのは當り前だらう。

『あの青木の野郎、今度來たら十分云つてやらないやア』とお貞が受けて、『借金が返せないもんだから、うちへ來ないで、こそ／＼とほかでぬすみ喰ひをしやアがる！』子供はふたりとも吹き出した。

『吉彌も吉彌だ、あんな奴にくツついてをならなくとも、お客さんはどこにもある。——あんな

奴があつて、うちの商賣の邪魔をするのだ。』

さう思ふのも實際だ。僕が來てからの様子を見てゐても、料理の仕出しと云つてもさうある様には見えないし、あがるお客はなほ更ら少い。たよりとしてゐたのは、吉彌獨りのかせぎ高だ。毎日々がたになると、家族は圍爐裡を取りまいて、吉彌の口のかかつて來るのを今か今かと待つてゐる。

やがて吉彌はのツソリ歸つて來た。

『何をぐづ／＼してをつたんだ？ 直ぐお座敷だよ。』お貞はその割り合ひに強くは當らなかつた。

『さう。』吉彌は平氣で返事をして、爐のそばに坐つて、『いらつしやい。』僕に挨拶をしたが、まるめて持つてゐた手拭としやぼんとをどこに置かうかとまごつてゐたが、それを爐のふちへ置いて、『一本、どうか』と、僕のそばの巻煙草に入に手を出した。

その時、吉彌は僕のうしろに坐つてゐるお君の鋭い目に出くはしたらしい。急に險相な顔になつて、

『何だい、そのにらみさまは？ 蛙ぢやアあるめいし。』手拭をここへ置くのがいけなけりやア、勝手に自分でどこへでもかけるがいい！ いけ

好かない小まツちやくれだ！』

『一體どうしたんだと、僕が鳥渡吉彌に當つて、お君をふり返ると、お君は黙つて下を向いた。

『あたがいがあるのがいけなけりやア、いつからでも出すがい。へん、去年身投げをした藝者の様な意氣地なではない。死んだつて、仕掛けて出てやらア。高がお客と商賣の料理屋だ、今に見るがいい』と、吉彌は頻りに力んでゐた。

僕は何にも知らない風で、かの女の口をつぐませると、それまでわく／＼してゐたお貞が口を出し、

『まア、えい。まア、えい。——子供同士の喧嘩です、先生、どうぞ悪からず。——さア、吉彌、支度、支度。』

『厭だが、行つてやらうか』と、吉彌はしぶ／＼立つて、大きな姿見のある化粧部屋へ行つた。

七

『お座敷は先生だツたの、ねえ、——あんなことを云つて、どうも失禮』と、吉彌は三味線を以つて這入つて來た。

『……僕はさつきから獨りで、どういふ風に油をしぼつてやらうかと、頻りに考へてゐる

たのだが、やさしい聲をして、やさしい様子で來られては、今まで胸にこみ合つてゐたささまの忿怒のかたちは、太陽の光に當つた霧と消えてしまつた。

『お酌と出した徳利から、心では受けまいと定めてゐた酒を受けた。然し、まだ何となく胸のもつれが取れないので、碌に話をしなかつた。』

『おこつてるの?』

『……』

『ええ、おこつてゐるの?』

『……』

『あたいたらない、わ!』

吉彌は赫と顔を赤くして、立ちあがつた。そのまま下へ行つて、僕のおこつてゐることを云ひ、湯屋で見たことを始いてゐるのだと云ふこととが若しも下のものに分つたら、僕一生の男を下げるのだと心配したから、

『おい、おい!』と命令する様な強い聲を出した。それでも、かの女は行つてしまつたが、まさかそのまま來ないことはあるまいと思つたから、獨りで酌をしながら待つてゐた。果して銚子を持つて直ぐ再びやつて來た。向うがつんとしてゐるので、今度は僕から物を云ひたくなつた。

『どうだい、僕もまた一つ蕎麥をふるまつて貰はうぢやアないか?』

『あら、もう、知つてるの?』

『へん、そんなことを知らない様な馬鹿ぢやアねい。役者になりたいからよろしく頼むなどと白ばツくれて、一方ぢやア、どん百姓か、肥取りかも知れないへツばこ且つくと乳くり合つてゐやアがる。』

『そりやア、あんまり可笑さうだ、わ。あの人がゐなけりやア、東京へ歸れないぢやアないか、ね。』

『どうして、さ?』

『ぢやア、誰れが受け出してくれるの? あなた?』

『おれのはお前が女優になつてからの問題だ。受け出すのは、心配なくおツ母さんが來て始末をつけると云つたぢやアないか?』

『だから、おツ母さんが來ると云つてゐるのです——』

それで分つたが、おツ母さんの來るといふのは、女優問題でわざ／＼來るのではなく、青木といふ男に受け出されるそのかけ合ひの爲めであつたのだ。

『あんな者に受け出されて、ヤツばし、こんな

しみツたれた田舎にくすぶつてしまふのだらうよ。』

『おほきにお世話だ、あなたよりもさきに東京へ歸りますよ。』

『歸つて、どうするんだ?』

『お嫁に行きますとも。』

『誰れが貴さまの様な者を貰つてくれよう?』

『憚りながら、これでも衣物をこさへて待つてゐてくれるものがありますよ。』

『それぢやア、青木が可笑さうだ。』

『可笑さうも何もあつたもんか? あいつもこれまでに大分金をつぎ込んだ男だから、なかなか思ひ切れる筈はない、さ。』

『どんなに馬鹿だつて、そんなのろまな男はなからうよ。』

『どうせ、おかみさんがやかましくツて、あたいをここには置いとけないのだから、たまに向うから東京へ出て來るだけのことだらう、さ。』

男はそんなものと高をくられてゐるのかと思へば、僕はまた厭氣がさして來た。

『お嫁に行つて、妾になつて、まだその上に女優を懲張らうとは、お前も随分ふてい奴、さ。』

『さうとも、さ、こんなにふとつたからだだもの、かせげるだけかせぐん、さ、ね。』

『ぢやア、もう、僕は手を引かう』と、僕は坐り直した。『青木が呼びに来るだらうから下へ行け。』

『あの人は今晚来ないことになったの——そんなに云はないで、さ、あなた』と、吉彌はあまえる様にもたれかかつて、『今云つたことはうそ、みんなうそ。決心してイるんだから、役者にして頂戴よ。おッ母さんだつて、あたいから云へば、承知するに定つてる、わ。』

僕は、女優問題さへ忘れれば、恨みもつらみもなかつたのだから、かうやつて飲んでゐるのは悪くもなかつた。

吉彌はまた早くこの厭な井筒屋を抜けて、自由の身になりたいのであつた。何んでも早く青木から身受けの金を出させようと運動してゐるらしく、先刻も亦青木の云ひなり放題になつて、その代りに何かの手筈を定めて来たものと見えた。おッ母さんから一筆青木に當てた依頼状さへあれば、あすにも樂な身になれるといふので、僕は思ひも寄らない偽筆を頼まれた。

八

青木といふのは、來遊の外國人を當て込んで、箱根や熱海に古道具屋の店を開き、手廣く

商賣が出来てゐたものだ、全然無筆な男だから、人の借金證書にめくら判を押した爲め、殆ど破産の状態に落ち入つたが、この頃では多少回復がついて來たらしかつた。今の細君といふのは、やつぱり、井筒屋の藝者であつたのを引かしたのだ。二十歳の娘をかしらに既に三人の子持ちだ。はじめて家を持つた時、などは、井筒屋のお貞その時は、まだお貞の亭主が生きゐてゐて、それが井筒屋の主人であつたの思ひやりで、臺どころ道具などを初め、所帯を持つに必要な物は殆どすべて揃へて貰ひ、飯の炊き方まで手を取らないまでにして世話して貰つたのであるが、月日の経つに従ひ、この新夫婦はその恩義を忘れたかの様に疎くなつた。お貞は、今に至るまでも、このことを云ひ出しては、輕蔑と惡口との種にしてゐるが、この二年來不景氣の店へ近頃最もしげ／＼來るお客は青木であつたから、陰では惡く云ふものの、面と向つては、進まないながらも、十分のお世辭をふり撒いてゐた。

青木は井筒屋の米櫃でもあつたし、また吉彌の旦那を以つて得々としてゐたのである。然しその實、苦しい工面をしてゐたといふことは、僕が當地へ初めて着した時尋ねて行つた寺の住

職から聴くことが出來た。

住職のことはこの話にさう編み込む必要がないが、兎に角、渠は僕の室へよく遊びに來た、僕もよく遊びに行つた。酔つて來ると、随分面白い坊主で、いろんなことをしやべり出す。それとなく、吉彌の評判を聴くと、色が黒いので、土地の人はかの女を『おからす藝者』といふことを僕に云つて聴かせたことがある。之を聴かされた日、僕は、歸つて來てから吉彌にもつと顔を見がく様に忠告した。かの女の黒いのは寧ろ無精だからであると思はれた。

『磨いて見せるほどあたいがうち込む男は、この國府津にやアゐないよ』とは、かの女がその時の返事であつた。

住職の知り合ひで、或小銀行の役員をつとめてゐる田島といふものも、亦、吉彌に熱くなつてゐることは、住職から聴いて知つてゐたが、この方に對しては別に心配するほどのこともないと思つたから、僕は眼中に置かなかつた。吉彌を通じて僕に會ひたいと云ふことづてもあつたが、僕は面倒だと思つてはねつけて置いた。且ちどうも當地にとどまる女ではないし、また歸つたら女優になると云つてゐるから、女房にしようなどいふ野心を起して、つまらない金は使は